慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ミシェル・ヴィユシャンジュを読むジュネ：『スマラ』から「イビスへの手紙」へ (2)
Sub Title	Genet lisant Michel Vieuchange : Smara et «Lettre à Ibis» (2)
Author	岑村, 傑(Minemura, Suguru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2015
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.108, (2015. 6) ,p.159 (82)- 178 (63)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01080001-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ミシェル・ヴィユシャンジュを読むジュネ
――『スマラ』から「イビスへの手紙」へ
(2)

岑村　傑

本稿は、ジャン・ジュネ「イビスへの手紙」をめぐる考察の後半部である。前稿では、「イビスへの手紙」が主題とするミシェル・ヴィユシャンジュのスマラへの旅と、刊行されたその記録が、同時代にどのように受け入れられたのかを見た[1]。ポール・クローデルに始まって、フランソワ・モーリヤックを経て、フィリップ・スーポーにいたるまで、称賛を惜しまない者がいれば批判に徹する者もいて、一様ではないヴィユシャンジュ受容のあり方が明らかとなった。

Ⅱ「イビスへの手紙」

1. 兵役

ヴィユシャンジュを読む当時のジュネとは、何者だったのか。

ヴィユシャンジュより6年遅れて1910年に誕生したジュネの幼少期をつぶさにたどることは、ここではしない。私生児、遺棄、孤児院、里子、徒弟、逐電、放浪、逮捕、感化院という境涯が、ヴィユシャンジュのヌヴェールでの平穏な家庭生活とは異質なものであったことを確認しておくにとどめよう。いま寄り添いたいのは、少年期を終え青年期へと入ろうとするジュネ、すなわち、およそ2年半を過ごしたメトレ感化院を去ろうとしている、1929年のジュネである[2]。本来であれば21歳をもって成人を迎えるまでメトレを離れることは許されないところを、はや18歳と数ヶ月でそれができたのは、ジュネがみずから兵役を選ん

だからである。のちに告白しているように、制服というものに愛着を覚え、人を指揮することに憧れていて、しかも男ばかりの集団生活は望むところであったのならば[3]、軍隊に入ることに迷いはなかったはずだ。1929 年 3 月、トゥールの徴兵局におもむいたジュネは、2 年間の兵役契約を結び、工兵としてまずはモンペリエ、つづいてアヴィニョンに配属される。そして 1930 年 1 月にはレバントの地、フランス委任統治領シリアへの派遣に志願して、ダマスカスの部隊に編入される。1930 年末までの 11 ヶ月におよぶこの滞在が、ジュネにとって中東アラブ世界との初めての接触だった。

ちょうど同じころ、1930 年 9 月から 11 月にかけて、サハラ砂漠西端ではヴィユシャンジュがスマラへの旅を決行していた。その、ヴィユシャンジュが基地とし、そこで没するモロッコを、ジュネもすぐに知る。

シリアからフランスに戻ってまもなくの 1931 年 2 月に 2 年の契約が満了し、ジュネは兵役から解放された。入隊したのもシリアに行ったのも自分で望んでのことだったが、とはいえ除隊になって名残惜しいということはなかっただろう。というのも、過酷な現実を知ったということなのか、「軍隊でぼくたちは受け身で生きなければならなかったけれど、そんなのは生きるということじゃない[4]」、と考えるにいたっていたからだ。軍隊から離れて「生きる」ために職を求め、トラムウェイ会社、薬局、さらには警官の口にまで売り込むが、しかし、いずれからも色よい返事は得られない。結局、窮したジュネはふたたび兵役にすがるほかなかった。1931 年 6 月からまた 2 年契約で、ただし今度はマグレブに向かうことになり、モロッコのメクネスに駐留する部隊に入ったのだった。そこからすぐにミデルトに赴任する。高アトラスと中アトラスの結節点に位置し、「反乱」部族「平定」のための拠点であったその街で、ジュネは参謀本部の秘書官を務めた。1931 年 10 月にメクネスに帰還、そこでの 16 ヶ月間の軍務ののち、今度はフランス国内ムルト＝エ＝モゼル県トゥールに転属となって、1933 年 2 月にフランスに帰国する。

とりわけミデルトでの軍事作戦にかかわったことは、ジュネにとっては忘れがたい体験だったようだ。数年後にジュネは、「アトラス山地にわけ入ることは、その伝説の秘密にわけ入っていくことだった」、「初めてのヨーロッパ人としてその地域に入っていくとき、もう疲れなどものともしなかった[5]」、と回想している。そのような興奮は、「世界に秘められた英雄的なものすべて、神秘的なもの

すべて」に惹きつけられて秘境を目指すヴィユシャンジュの、「眠る場所なんてどこでもいい、どんなことにも耐えてみせる[6]」という高揚から、けして遠いものではないだろう。

ジュネはトゥールで早々に、兵役満期となる1933年6月までの休暇を得た。当初はトゥールに滞在したままでパリに頻繁に通い、やがて完全に居を移して、19区の福祉事務所で雑役をして糊口をしのぐ。イビスの知遇を得て、その仲間たちと往来したのはこのころである。そして、1932年の終わりに刊行されていたヴィユシャンジュの旅行日誌『スマラ』と、ジュネは出会う。一読魅了されたジュネはその本をイビスのもとに送り、そこに添えた数葉の紙に書かれていたのが「イビスへの手紙」だった[7]。

メトレを出てから数年間のジュネの遍歴を追ったあとでは、ジュネがヴィユシャンジュの本を手にとったのも、なかば必然であったように思われる。相通ずるところのない生い立ちでありながら、両者はともに異境に、旅に、冒険に憧れていたのだ。シリアへの配属をみずから求めてオリエントと交わり、モロッコではいまだヨーロッパに屈しない土地に刺激されたジュネが、神秘の都スマラを目指して反乱部族のただなかへと、しかも自分のように軍という組織の後ろ楯もなく飛び込んでいったヴィユシャンジュに、関心を覚えないはずはないだろう。シリアでの兵役中、ジュネはジッドの『背徳者』*L'Immoraliste* を読んだ[8]。少年愛に目覚める主人公ミシェルの姿をジュネは自分の同性愛への是認ととらえた、というのが大方の見方だが、いま重要なのは別の登場人物、ミシェルの思想的先導者という役回りのメナルクである。探検旅行を重ねる人生を送っていたメナルクは、パリで再会したミシェルにこう述べる。

> わたしは休息が大嫌いなのです。人は所有すると休息したくなり、安全のなかでは眠ってしまう。わたしは生きることを愛していますから、目を覚ましたまま生きていたくて、それで、まぎれもない富に囲まれていても、かりそめの状態にいるのだという感覚を保ち、そうやって人生をたぎらせて、少なくとも高ぶらせています。危険が好きだというわけではありませんが、でも、波乱に満ちた人生は好きですし、そういう人生から、あらゆる瞬間に、わたしの全気力、全幸福、全健康を捧げるよう求められることが、望みなのです[9]。

はたして「休息」に背を向け、植民地省から新たな任務を託されて、メナルクはふたたび旅立っていく。ヴィユシャンジュの存在はジュネの目に、まるでメナルクが虚構から現実に飛び出してきたかのように映った、ということはなかっただろうか[10]。

2. ヴィユシャンジュ

では実際、『スマラ』を読んだジュネは、「イビスへの手紙」のなかでどのようなヴィユシャンジュの肖像を描いているのだろう。そこにいるのは、ほかの書評でのように、キリストばりの救世主なのか、行動する詩人なのか、甘やかされたブルジョワの子どもなのか。先取りしていえば、想像にかたくないことだが、ジュネはヴィユシャンジュを称賛する。しかし、その称賛には、おかしな、しかしそれゆえに「イビスへの手紙」がジュネ独自の色を帯びる、ある逸脱がまぎれているようなのだ。

闘う若者たち

「イビスへの手紙」を吟味するために、さらに確認しておくべき周辺状況がある。書評であるそれが掲載されるはずだった媒体のことだ。されるはずだった、というのは、その媒体、すなわちイビスによって 1933 年 1 月に創刊されたごく薄手の月刊誌『若者たち』*Jeunes* は、同年 4 月の第 4 号をもって、おそらくは資金難のために、刊行が途絶えたからである。5 月に入ってから『スマラ』とともにイビスのもとに届けられた「イビスへの手紙」は、こうして筐底に眠る運命となったのだった。しかしながら、結局は掲載されなかったとしても、その執筆時には、ほかの新聞雑誌ではなく『若者たち』への寄稿なのだということが強く意識されていたにちがいない。ジュネはイビスに、共闘の誓いともとれるような言葉を送っている。「あなたたちの大義はぼくの大義ですが、というのもそれはあなたと彼女の大義だからです。そうである以上、ぼくはその大義が勝利することを望み、全身全霊でそのために尽くすつもりです[11]。」「イビスへの手紙」は、ここで約束された献身の、たがわず履行されたひとつであった。だがイビスたち一党の、つまりはその機関誌たる『若者たち』の「大義」とは、どのようなもの

だったのか。

『若者たち』は平和主義、フェミニズム、無政府主義、心霊主義、ヨーロッパ統合、反ファシズムを標榜する雑誌であったらしい[12]。しかし、そのように羅列しても、かえってつかみどころがない。第４号のイビスによる社説を頼りに、その輪郭をもう少し明確にしてみよう。

> われわれは何者か。暴力と所有と不正と偽善の上に建つ文明に辟易する若者の一団、その成員のうちの少数が贅をひけらかす面前で大多数が貧窮に苦しむという事態を回避するすべを知らず、そうする力もない体制、社会的災禍のもっともおぞましいものである戦争を食い止めえなかった体制に、反旗を翻す若者の一団、自分たちと同じ若い同志たちによる、新たな、より調和した、そしてとりわけ公正な社会の建設への助力に努めたいと考える、若者の一団である[13]。

『若者たち』が戦いを挑む相手は、既成秩序全体であり、現代文明そのものである。「いかなる政党にも支持されていない[14]」、「政党を形成することを望んでなどいない[15]」と断言する『若者たち』は、特定の政党や個別の施策に異議を唱えようとするものではない。権威や搾取や抑圧によって甘い汁を吸っている人間たちがもれなく敵なのだ。別の言い方をするなら、年長者すべて、若者ではない者すべてが狙われているのである。ならば逆に、『若者たち』が信奉するさまざまな主義や理想も一語に、すなわち「若さ」という言葉に収斂させることが可能だろう。硬直や忍従を拒絶すること、建設をするために破壊を厭わないこと、あるいはメナルクのように安眠を嫌って覚醒したまま生き抜くこと、それが『若者たち』の大義にほかならない。

すでに見たように、『スマラ』のヴィユシャンジュは青春の典型であり、そうであるなら『若者たち』にとっては、よろこんで誌面を割くにふさわしい存在だっただろう。「イビスへの手紙」には、ヴィユシャンジュのスマラ行が匹敵する偉業として、『酔いどれ船』、『ドルジェル伯の舞踏会』、ルネ・カイエによるトンブクトゥへの旅[16]が引き合いに出されている。詩人ランボー、小説家ラディゲ、探検家カイエとヴィユシャンジュに共通するのは、いずれも若くして後世に残る仕事を為したこと、そしてさらに重要なのは、若くして没したことである[17]。老

いて年長者になることなく、彼らは永遠に若いままであり続け、若さの象徴と化し、『若者たち』に集う若者には偶像となりえただろう。「イビスへの手紙」は、ヴィユシャンジュの『スマラ』に感動したジュネによって書かれたものであると同時に、『若者たち』に共鳴するジュネによって書かれたものでもあった。

冒険家の無限

さて、「イビスへの手紙」の冒頭部分を、少し長くなるが、引用してみよう。

> 最初はあなたに、ミシェル・ヴィユシャンジュのスマラへの旅について語ることをお願いするつもりだった。そうなればわたしがしなくて済んだのだろうが……。わたしもいまは自覚している、つねに先の彼方を愛する「北アフリカ駐屯兵」こそが、その若き冒険家の為したことが何であったのかを語るべきなのだということを。彼はみずからの天才をまさに昂ぶらせることで、狂おしい情熱を、たぎる欲求を得て、自己を実現したのだ。
>
> そう、自己を実現する s'accomplir こと！　みずからが為すことのなかで自分自身になるということ。ミシェル・ヴィユシャンジュはもはやスマラへの旅そのものでしかない。
>
> わたしたちは誰でも、ここではないどこかに行きたいというその欲求を知っていると、あなたはわたしに言った。広さはそれぞれでも、そこではわたしたちがあまりにも自分自身を発散しているために空気が吸えなくなってしまっている空間を逃れ fuir、そうすることでわたしたちは自分自身から逃れようと考える、と。わたしたちは、わたしたちで汚れていない空気を欲するのだと。
>
> ミシェル・ヴィユシャンジュは逃げたいなどとは思わなかった。行き aller たかったのだ。そこに行って、知りたかった、おそらく希望を叶えたかったのだ[18]。

ジュネにとってヴィユシャンジュが偉大なのは、「自己を実現する s'accomplir」ことに成功したからである。旅のなかでの、何か学術的な新発見にではなく、自己の発見にこそ、あるいは旅の果てにスマラにではなく、自己に到達することにこそ、ヴィユシャンジュの天才は発揮されたというのだ。そうであるからには、

スマラへの旅はヴィユシャンジュの存在と一致し、スマラへの旅がなければヴィユシャンジュも存在しない。その旅の特質を、さらに二つの動詞、「逃げる fuir」と「行く aller」の対照が説明する。ヴィユシャンジュはここから、あるいはここに囚われている自分自身から「逃げる」のではなく、彼方に向かって、彼方に待つ自分自身に向かって、「行く」のである。「冒険家」とは、いや大切な形容詞を忘れてはなるまい、「若き冒険家」とは、突破し前進する者であって、逃避する者ではない。

しかし、その「行く」ことの実相については、さらに慎重に検討しなければならない。「イビスへの手紙」の終盤には、次のような一節も読めるからだ。

> アトラス山脈の前に立ったとき ── 「後ろには何があるんだ」、と人は言う。アトラスを越えると、目の前は灰色と黄土色の国で、大きな太陽が輝き、いらだった空が広がる。峡谷がある。彼方から流れてくる一本の川。新たな別の山が夢見させる ── 「後ろには何が？」 あるのは空の広がる同じ灰色の国だ［LI 44］。

山はひとつではなく、後ろはひとつではなく、国も、太陽、空、峡谷、川もひとつではない。障害を越え目的地に着いたと思うや、目の前にはまた障害が勃然とそびえて自分を越えてみろと挑み、その後ろにあるはずの別の国が発見してくれといざなう。「行く」という行為には、つまり、果てがない。「自己を実現する s'accomplir」という代名動詞は « accomplir » が元だから、そこには完遂や充足が含意されているが、それとほぼ同義として用いられているはずの「行く」は、遂げることも充ちることも知らないのだ。

「イビスへの手紙」の散文部分はこう締めくくられている。

> 行くのだ！　つねに先へと！　すべては同じだと知りながら、さらに遠くを望むのだ。
>
> 行くのだ、ひとりで、深く思索をめぐらせながら、太陽に肌を焦がし、月の下で朽ちるために！
>
> 彼方を愛する者には、つねに、昼の太陽にまどろむいくつものスマラが姿を現すだろう。そして幾人もの死者たちが［LI 44］。

スマラもひとつではない。行ったスマラの先に別のスマラがあり、さらにその先にまた別のスマラがある。「行く」というのは、つねに彼方、彼方へと行くということである。「自己を実現する」についても同様だとすれば、自己はひとたび充足するのだが、充足した自分に不足を感じてまた充足を目指し、それをひたすら繰り返す、と考えればよいだろうか。

しかしながら、そのように達成と反復、一回性と回帰のあいだに整合性をつけることをジュネが意識していたのかどうかは、定かではない。むしろ、自己探求の成就を希求しつつ、しかしその自己探求はいつまでも成就しないという、すべての若者を苛む矛盾を、みずからもその若者のひとりであるジュネは、ただ鷲づかみにして呈示している、ということなのかもしれない。理知的な分析でないからこそ、そこには若さに特有の憧憬と焦燥が、初々しく表現されているのである。

芸術家は「行く」

ところで、ヴィユシャンジュを指すのにジュネが用いる言葉は、「冒険家」だけではない。

> 単なる英雄でしかなかったとするなら、ヴィユシャンジュはわたしたちが愛するには足りないだろう。彼はひとりの恋人 amant だった。彼は自分の為すこと œuvre を、それを実現する前、1 年のあいだ、愛撫したのではなかったか［LI 42］。

「英雄」や「恋人」という形容は、ほかのヴィユシャンジュ評、たとえばクローデルやモーリヤックのそれでも、重宝されていたものだ。ここではとくに「恋人 amant」のほう、というよりもむしろ、その恋人が愛する対象に、注目しよう。クローデルの『スマラ』序文では、恋人はキリスト教的清貧を愛するのだったが、ジュネによる恋人ヴィユシャンジュが愛するのは、「自分の為すこと」、すなわちスマラへの旅そのものである。重要なのは、その「為すこと」、そして、じつは、すでに引用した冒頭部の「若き冒険家が為したこと」と訳した「為したこと」も、どちらもフランス語では « œuvre » だということだ。« œuvre » とは「仕事」、「仕業」であるが、いうまでもなくそれは「作品」のことでもある。つま

り、スマラへの旅はヴィユシャンジュにとってひとつの作品なのであり、ヴィユシャンジュはその作品を創造し、それを愛でる者にほかならない。冒険家の像が芸術家の像と重なる。

はっきりと、ジュネは書いている。

> じつに彼の遠征は一個の芸術作品であり、芸術作品は逃避ではない。ヴィユシャンジュを芸術家、天才芸術家だと見なそう。
>
> 若者たちがこのような作品を創造するとき、彼らは疲弊し、力尽きて、死ぬ。感情と感覚がおびただしく使い果たされ、何も残りはしない。人は、『酔いどれ船』によって、『ドルジェル伯の舞踏会』によって、トンブクトゥへの旅によって、スマラへの旅によって、死ぬのだ［LI 42］！

すでに触れたように、ここでランボーの『酔いどれ船』、ラディゲの『ドルジェル伯の舞踏会』、カイエのトンブクトゥへの旅、ヴィユシャンジュのスマラへの旅が並置されている。いずれも若者による偉業であるからこそ、詩と小説と旅が、文学と冒険が、比肩するのだったが、そこにさらにもうひとつの共通項が加わることになる。ジュネによれば、その偉業は、ランボーやラディゲのそれはもちろん、カイエとヴィユシャンジュのそれも、すべて芸術作品にほかならない。芸術家も冒険家も、「逃避」せず、つまり「行く」という行為に献身し、心身を焼尽するかぎりにおいて、同族なのである[19]。

ヴィユシャンジュの冒険を芸術的創造になぞらえたのは、ジュネだけではなかった。たとえばアンドレ・ルソーも、ヴィユシャンジュは詩人であり、そのスマラ行は一篇の詩なのだと主張していたことを思い出そう。1933 年 1 月に『ル・フィガロ』紙に載ったルソーの記事を 1933 年 2 月にモロッコからフランスに帰国したジュネが読んだ可能性は低いが、それを読んでいなかったら着想するのがむずかしいほど、文学と冒険の類比は突飛なものではないだろう。ましてやジュネは、次のような文章に、こちらのほうはほぼ確実に、接していたのである。

> 今日詩が、とりわけ哲学が、死文と化している原因をご存知ですか。それらが生から切り離されてしまっている、ということなのです。ギリシャは生をそのまま美に転じていました。ですから、芸術家の生はそれ自体が詩的な美

の創造でしたし、哲学者の生は彼の哲学の実践でした。また、生と混じりあうことで、たがいに知らぬ同士でいるのではなく、哲学は詩を育て、詩は哲学を表現して、そこにはみごとな説得力が生まれていました。現在ではもう美は行動しないし、行動は美しくあることに気をつかわず、叡智は叡智で我関せずでふるまっているのです[20]。

ジッド『背徳者』のなかでメナルクが語る芸術観である。ここで失われた理想状態とされている、生や行動と、詩、哲学、芸術、美との一致を、現代でも生き続けている個人がときにいて、冒険家メナルク自身がそうであるのはもちろんだが、冒険家ヴィユシャンジュもそのひとりだと、ジュネは力説していることになるのだろう。

恋する北アフリカ駐屯兵

「冒険家」、「英雄」、「恋人」、「芸術家」。じつはこれらとは異なる角度から、しかもこれらよりもいち早く、ジュネにとってヴィユシャンジュが何者だったのかを教えてくれる言葉がある。「スマラへの手紙」の冒頭をあらためて見てみよう。

> 最初はあなたに、ミシェル・ヴィユシャンジュのスマラへの旅について語ることをお願いするつもりだった。そうなればわたしがしなくて済んだのだろうが……。わたしもいまは自覚している、つねに先の彼方を愛する「北アフリカ駐屯兵 blédard」こそが、その若き冒険家の為したことが何であったのかを語るべきなのだということを。

「北アフリカ駐屯兵」に注目したい。そのあまり見慣れない語を用いてここでおこなわれてるのは、いわば資格確認だ。ヴィユシャンジュについて語るのに「北アフリカ駐屯兵 blédard」をおいて適任者はいない、とジュネはいう。« blédard » は、マグレブのアラビア語で「土地」を指す « bled » から派生して、そのマグレブの「土地」で軍務にあたる兵士を意味する語である。もちろん、ここでの北アフリカ駐屯兵とは、ジュネ自身にほかならない[21]。そして、ヴィユシャンジュもまた、ジュネよりおよそ5年前、1926年の春から翌年の夏にかけて兵役でモロッコに赴任した北アフリカ駐屯兵であったのだ[22]。北ア

フリカ駐屯兵のことは北アフリカ駐屯兵がいちばんよくわかるのだから、自分こそヴィユシャンジュを語るにふさわしい、と自認することから、ジュネは「イビスへの手紙」を始めているのである。

しかし、「北アフリカ駐屯兵」という言葉の用途は、ヴィユシャンジュ評者としての正当性の認証手続きのみに還元できるものではないのではないか。つまり、ヴィユシャンジュと自分が北アフリカ駐屯兵として同類なのだとするなら、自分もまたヴィユシャンジュと変わらない冒険家なのではないか、少なくともほかの人間よりもそれに近いところに立っているのではないか、という思いがそこには透けて見えるようなのだ。ヴィユシャンジュが「彼方を愛する者 amant du là-bas［LI 44］」だとするなら、自分も「先の彼方を愛する amoureux du plus loin」北アフリカ駐屯兵である。ならば自分もまた、ヴィユシャンジュと同じく、冒険家のみならず、芸術家たりうるはずだ。そういう自負が、あるいは色気が、「イビスへの手紙」には漂っている。そのような自負や色気は、これまでに見たほかの書評者にはなかったものだ。もちろん、異様なのはジュネのほうである。ヴィユシャンジュの称揚は自分の役目だと勢いこんで語るうちにふと自分ばかりが前面に出てしまうとき、その慎みのなさは書評の領分を逸脱するものにちがいない。逸脱した先に広がるのは、では、いずれの領分なのか。

3. ジュネ

別の問いを経由しよう。そのような「イビスへの手紙」は、従来の詩篇「死刑囚」から、ジュネの最初の文学作品という称号を譲られてしかるべきものなのか[23]。なるほど、「死刑囚」やその後の小説との関連を重視するだけでも、「イビスへの手紙」が孕むのちのジュネの文学への兆しを指摘することは可能だろう。

生成する墓

「イビスへの手紙」の末尾には一篇の詩が、すなわち、その価値はおいても、疑いようのない文学作品が、掲げられている。

——「ぼくの前にはひとりの人間もいない。」
おお、ひどく混乱したよろこび

そして苦痛に満ちた！
魂のなかの一瞬の無秩序
均衡したる魂の。
あさましい虚栄！
悪臭を放つ運動、あなたたちをして
みずからに神を感じさせる！
ミシェル・ヴィユシャンジュよ、せめて
おまえのスマラでの3時間のうちに
おまえはそのひどく混乱したよろこびを感じたのか
そして苦痛に満ちた？
だがおまえはその瞬間の神を乗り越えた。
そしておまえはふたたび人間になる
みずからの意志を完遂する人間に［LI 44］。

1942年に刊行された詩篇「死刑囚」よりも10年近く前に、ジュネが書いていた詩である。しかも、「死刑囚」との相似は、詩という形式だけではない。この詩は、はっきりとヴィユシャンジュに呼びかけ、ヴィユシャンジュに捧げられている。ヴィユシャンジュの生と死を、その苦痛とよろこびと変身を唄っている。つまり、『スマラ』が弟ジャンによる兄ミシェルのための「墓 tombeau」だったように、この詩も、ジュネによるヴィユシャンジュのための墓なのだ。そうなると、「死刑囚」が、さらにはその翌年に出版された処女小説『花のノートルダム』も、やはりひとりの人物、殺人を犯して死刑となったモーリス・ピロルジュに捧げられているという事実を、思い起こさずにはいられない[24]。死者に献ずる墓というジュネの文学の本質は、「イビスへの手紙」にもすでに懐胎されているのである。

では、この詩にいたるまでの散文部分についてはどうか。「最初はあなたに、ミシェル・ヴィユシャンジュのスマラへの旅について語ることをお願いするつもりだった」という冒頭の一文は、手紙の書き出しとしては意表を突くものではなく、文学的であるともないとも、にわかには判断しがたい。しかし、たとえばその最後の部分、すでに引用した次の数行には、それに続く詩を前にして、すでに詩的高揚が横溢していることはたしかだろう。

行くのだ！　つねに先へと！　すべては同じだと知りながら、さらに遠くを望むのだ。

行くのだ、ひとりで、深く思索をめぐらせながら、太陽に肌を焦がし、月の下で朽ちるために！

彼方を愛する者には、つねに、昼の太陽にまどろむいくつものスマラが姿を現すだろう。そして幾人もの死者たちが[25]。

おそらく、それが文学作品なのかどうかという問題よりも、その始まりから終わりに向かって、ひとつの流れ、変容、あるいは生成を追うことができるという点にこそ、「イビスへの手紙」を読む醍醐味がある。手紙という形式をとって始まり、それが書評となって、そのうちに書き手の詩的感興が刺激され、昂ぶり、ついには詩一篇に結実して終わる。「イビスへの手紙」は文学作品だとしてもけして均質なものではなく、それはむしろ、ひとりの若者の精神が文学へと駆けていく、その不安定な軌跡の記録だととらえるべきものである。

土地（ブレド）を知らない北アフリカ駐屯兵（ブレダール）

北アフリカ駐屯兵（ブレダール）としての自分とヴィユシャンジュを同一化させようというジュネの志向に、書評者がわきまえるべき節度からの逸脱を見たが、その逸脱は、つまるところ、文学への逸脱なのだ。じつをいえば「イビスへの手紙」には、肩を並べたいどころか、ヴィユシャンジュを凌駕しようとさえもくろむジュネが、ときに顔を出す。たとえば、「痴呆のように従順で、陰鬱な、フランスとスペインの軍隊に襲われたベルベルの国［*LI* 42］」を自分は目の当たりにしたのだと、ジュネは強調する。

そう！　憎悪することができる人間がいるとしたら、それはまさに、自分たちの侵すべからざる独立のうちで修道場（ザーウィア）を侵されて、虐待を受けた人々、貧しい農耕民であるシュルーフ族の人々だ！　――やつらを滅ぼしてしまおうか、とフランスとスペインは尋ね、かたや滅ぼされる側は、恐怖に敢然と立ち上がり、血が流れるまで抗うのだ［LI 42］。

このようにフランス植民地軍の蛮行について書き、憎悪の権利がベルベル人た

ちにはあると認めることは、「反乱部族の地へ」という表現を無批判にタイトルに含んでいた『スマラ』のなかではあるはずもないことだし、『スマラ』の書評も、かなり手厳しいスーポーのものでさえも、打ち出していない態度である。ここには、「痴呆のように従順で、陰鬱な」軍隊に属する北アフリカ駐屯兵でありながら、痴呆とは対極にある怜悧な批判精神をもつジュネがいる。さらに興味深いのは、そのように自分は特別な北アフリカ駐屯兵なのだと匂わす一方で、ヴィユシャンジュはたいした北アフリカ駐屯兵ではないとほのめかしていることである。

> ヴィユシャンジュの苦痛はむごいほどだ、なぜなら彼はその土地を知らないのだから。兵役のとき、彼はマザガンにとどまっていて、彼の同僚だったわたしの友だちの話しぶりでは、あまり体力がなく、行軍ではいつも足を痛めている男だったようだ。彼の日誌には、激しい情熱を帯びないときには、泣き言がとぎれることがない［LI 43］。

ヴィユシャンジュはマグレブ特有の土地を知らない、すなわち真の北アフリカ駐屯兵ではない、とは、穏やかではない。行軍に苦しむひ弱な姿の暴露は北アフリカ駐屯兵としてのヴィユシャンジュを辱め、日誌には不平ばかりだと言ってしまえばスマラへの冒険を蔑むことになるだろう。悲惨な現実を知る本物の北アフリカ駐屯兵であるジュネと、あまりにもうぶな、まやかしの北アフリカ駐屯兵であるヴィユシャンジュの差は開くばかりである。いやむしろ、それがジュネの望みだったのではないか。もし、北アフリカ駐屯兵としても、ひいては冒険家としても、あるいは芸術家としても、自分のほうが優越していることを、少なくとも優越する潜在力を秘めていることをほのめかしたかったのだとするならば、ジュネの書評者としての慎みのなさは度しがたい。しかし、そのはしたなさこそが、ジュネの文学への抑えがたい欲望の表出である。「イビスへの手紙」には、冒険家であり芸術家であるヴィユシャンジュの姿が描かれていると同時に、冒険家や芸術家に、詩人に、作家に、なろうとあがくジュネの姿が映っている。その姿は生々しく、滑稽でさえあり、しかしまぎれもなく、文学的、なのではないか。

写真への不感

しかしその一方で、ヴィユシャンジュの『スマラ』とそれへの反響を調べていくと、「イビスへの手紙」にはそれがジュネの文学的テクストだとすると奇妙な、看過しがたい欠落があることに、気づかざるをえない。ジュネはそこで、写真への言及をいっさいしていないのである。

すでに『スマラ』の構成を示すなかで記したように、そこには50枚以上の写真図版が挿入されていた。砂漠や建造物や現地の人々の写真は旅の学術的価値を保証するためのものだったが、『スマラ』を評する者の関心を惹いたのは、むしろヴィユシャンジュ自身の肖像写真だったようだ。モーリヤックもそのひとりである。

> そしてわたしが『スマラ』の1ページ目を開くと、そこにはミシェル・ヴィユシャンジュの肖像が載っている。若く力に満ちたその顔つきに、笑みはない。二本の眉のあいだには、厳しいしわが一本刻まれている。旅の折々に撮られたほかの写真では、若い体がひどく縮んでしまったかのようだ。もはや骨だけになってしまったその顔は、最後の眠りへの備えができている。しかしながら、これこそがわたしたちにとっての希望の顔つきだ[26]。

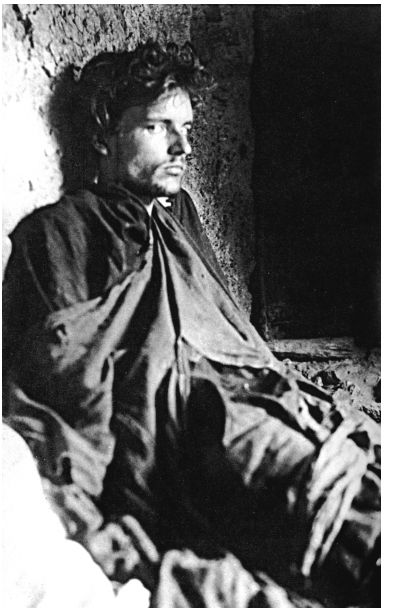
モーリヤックに強い印象を残しているのは、旅に出る前の生気あふれるヴィユシャンジュの顔と旅に蝕まれていったヴィユシャンジュの顔の対照である。モーリヤックだけではない。『スマラ』評の概観ではとりあげなかったが、ジャン・コクトーもまた1932年にこう書いている。

> 1930年にリオ・デ・オロと幽霊都市スマラによって嚙み砕かれ、すりつぶされ、吐き出されたミシェル・ヴィユシャンジュの物語を、心かき乱されて読み終える。ああ！　旅立ちの写真のあとに見れば、忘れることのできない帰還時の写真。流刑地で撮られたいかなるポートレートが、死んだ詩人のどんな顔が、それに匹敵しようか。わたしたちを見つめ、そしてその都市を見つめている視線。たくましいひとりの若者が、みずからの命と引き換えに、死の都市を束の間目にする[27]。

ヴィユシャンジュ、旅の前

なるほど、たとえばここに転載した2枚の写真を比べれば[28]、その一方から他方への変化は衝撃的である。出発前の顔が若さに満ちているだけに、冒険を経て心身の疲労に沈む顔はなおさら無残となり、そこにモーリヤックは人間全体の罪を贖う子羊を見たのだったし、コクトーはみずからの命を賭して死と交わろうとする、詩人以上の存在を見るのである。

だが、ヴィユシャンジュについて語る者でもその肖像写真について語らない者は多いのだから、ジュネもそうであることにさして不思議はないのではないか。いや、ことジュネに関しては、それはやはりいぶかしいのだ。なぜなら、写真は、ジュネの文学的想像力にとって欠かせない淵源のひとつだからである。処女小説『花のノートルダム』は新聞に掲載された殺人者ヴァイドマンの写真の描写で幕を開けるのだった。あるいは、次の小説『薔薇の奇蹟』では、ピロルジュの顔写真を切り抜いていく語り手に詩的幻想が訪れるではないか[29]。ジュネの文学はジュネの感性と写真、とりわけ愛する者たちの肖像との接触から生まれるといっても過言ではない。にもかかわらず、これほど印象的なヴィユシャンジュの写真に感応していないというのは、どうしたことだろう。



ヴィユシャンジュ、旅の途中

おそらくは、その感性がまだジュネには宿っていなかったのだ。獄中にある『花のノートルダム』の語り手は、お気

に入りの犯罪者やボクサーの切り抜き写真を獄則の裏に貼りつけ、夜になるとそれを眺めながら夢想に耽っている。

> そこで、わたしの、わたし自身直接は知らない恋人たちの助けを借りて、ひとつの物語をつむいでいこうと思うのだ。主人公は彼ら、壁に貼りつけられた彼らと、ここにこうして閉じ込められているわたしである。あなたたちが読み進めるにつれて、登場人物たち、ディヴィーヌも、そしてキュラフロワが、わたしの話の肥やしとなるために、まるで枯れ葉のように壁から舞い落ちてくるだろう[30]。

この秘密の個人ギャラリーのなかに、物語に養分を与えるその腐葉土のなかに、ヴィユシャンジュの写真は含まれていないだろう。『スマラ』を読むジュネは自分がそのように写真を蒐集するようになることを知らなかった。「イビスへの手紙」のなかで、作家ジュネは生まれようと胎動しているが、まだ生まれてはいない。

前稿の最初で見た、『花のノートルダム』の一節に戻ろう。「まったく、この子をフーコー神父やミシェル・ヴィユシャンジュにでもしようというのか」という文は、「花のノートルダム」につく弁護人のどうしようもない無能さを揶揄するためのものだった。しかし、そのように用いられているとき、ヴィユシャンジュ自身もまた、揶揄とはいわなくとも、ずいぶんと軽く扱われていることになる。そこでは、「イビスへの手紙」でジュネが見せた、ヴィユシャンジュへの感嘆は褪せてしまっている。さらに40年余りを経て、イビスの息子が「イビスへの手紙」について問い合わせた手紙に対し、ジュネはこう返信する。

> たしかにイビスのことは知っていたが、亡くなったとは。『スマラ』も読んだことがある。ただ、残念ながら、あなたが言う記事の計画のことは、もう何も覚えていない。ミシェル・ヴィユシャンジュの名前もそうで、あなたから教えられて、聞いたことがあると思い出すくらいなのだから[31]。

ヴィユシャンジュの名前はジュネの記憶に跡を留めておらず、ジュネがヴィユシャンジュに抱いた激しい共感も霧散した。しかし、「イビスへの手紙」はたしかに残り、存在している。それは、ヴィユシャンジュの墓であると同時に、若きジュネ、芸術家たらんとする北アフリカ駐屯兵ジュネの墓でもある。

註

1 岑村傑「ミシェル・ヴィユシャンジュを読むジュネ ――『スマラ』から「イビスへの手紙」へ（1）」、『藝文研究』第 107 号、2014 年、p. (132)-(154)

2 ここで追うジュネの遍歴については、次の詳細な調査に拠った。Albert Dichy et Pascal Fouché, *Jean Genet. Matricule 192.102. Chronique des années 1910-1944*, Gallimard, 2010.

3 Rapport médico-légal du 23 mars 1938 par le docteur Barreaux, dans Albert Dichy et Pascal Fouché, *op. cit.*, p. 376.

4 Lettre du 23 mars 1931, dans Albert Dichy et Pascal Fouché, *op. cit.*, p. 223. なお、本稿での引用はすべて、既訳があるものについてはそれに多くを教えられながら、筆者が訳出したものである。

5 Rapport médico-légal du 23 mars 1938 par le docteur Barreaux, rapport cité, p. 376.

6 Michel Vieuchange, *Smara. Carnets de route* (1932), publiés par Jean Vieuchange, préface de Paul Claudel, Payot, coll. Petite Bibliothèque Payot, 1993, p. 23.

7 Jean Genet, *Lettres à Ibis*, présentation et notes de Jacques Plainemaison, Paris, Gallimard, coll. l'arbalète, 2010, Lettre 4, p. 38 を参照。

8 Rapport médico-légal du 23 mars 1938 par le docteur Barreaux, rapport cité, p. 376 を参照。

9 André Gide, *L'Immoraliste* (1902), Paris, Gallimard, coll. Bibliothèque de la Pléiade, 2009, p. 650.

10 ジュネがジッドに送った手紙のなかには、メナルクの名前も見える。Albert Dichy et Pascal Fouché, *op. cit.*, p. 244 を参照。

11 Genet, *Lettres à Ibis, op. cit.*, Lettre 1, p. 27.「彼女」とは、イビスの同志であるシモーヌ・アルメルのこと。

12 Jacques Plainemaison, « Présentation », dans Genet, *Lettres à Ibis, op. cit.*, p. 10 を参照。

13 Éditorial de *Jeunes*, dans Genet, *Lettres à Ibis, op. cit.*, p. 101-102.

14 *Ibid.*, p. 101.

15 *Ibid.*, p. 103.

16 ルネ・カイエ René Caillié（1799-1838）は、1828 年、スマラ同様「神秘の都」として知られていた西アフリカ、ニジェール川中流に位置するトンブクトゥに入り、そこに 2 週間滞在した。

17 Jacques Plainemaison, « La première œuvre de Jean Genet. Étude littéraire de la « Lettre à Ibis » », *Studi Francesi,* Anno LVII, Fascicolo II, n° 170, maggio-agosto 2013, p. 337 を参照。

18 Genet, « Lettre à Ibis », *Lettres à Ibis, op. cit.*, p. 41-42. これ以降、この文献への参照は、本文でも註でも、LI の略号とともにページ数のみを記す。

19 ヴィユシャンジュやランボー、カイエとの比較については、以下が興味深い。Marie Gautheron, « Michel et Jean, Arthur et René : écrire le désert avec son corps », *L'Imaginaire du désert au XXe siècle*, études réunies par Jaël Grave, Paris, L'Harmattan, 2009, p. 29-59.

20 Gide, *op. cit.*, p. 656-657.

21 ある手紙のなかで、ジュネは自分のことをやはり「北アフリカ駐屯兵（ブレダール）」と呼んでいる（Lettre portant le cachet de réception du 10 août 1931, dans Albert Dichy et Pascal Fouché, *op. cit.*, p. 231）。

22 ヴィユシャンジュの兵役体験については、次に詳しい。Antoine de Meaux, *L'Ultime désert. Vie et mort de Michel Vieuchange*, coll. d'ailleurs, Phébus, 2004, p. 68-84.

23 ジュネの作品としての「イビスへの手紙」については、以下で触れられている。鵜飼哲「偶然の飛沫――『イビスへの手紙』『判決』刊行に寄せて」、『ユリイカ』2011 年 1 月号、特集「ジャン・ジュネ――“悪”の光源・生誕一〇〇年記念特集」、p. 151-159 ; Marie-Claude Hubert, « Lettre à Ibis », *Dictionnaire Jean Genet*, sous la direction de Marie-Claude Hubert, Paris, Honoré Champion, 2014, p. 381-382 ; Mairéad Hanrahan, « Portrait de l'artiste en jeune homme », *Spirale*, n° 240, printemps 2012, p. 43-45. しかし、いずれも短い紹介にとどまるものである。もっとも詳細に分析して、「イビスへの手紙」をジュネの最初の文学作品として結論づけているのは、イビスの息子で、『イビスへの手紙』の編者でもある、ジャック・プレーヌメゾンだろう（Jacques Plainemaison, « La première œuvre de Jean Genet. Étude littéraire de la « Lettre à Ibis » », art. cité）。

24 岑村傑「ピロルジュの墓、あるいはジュネにおける幻想の起源」、『藝文研究』第 103 号、2012 年、p. (222) - (242) を参照。

25 「イビスへの手紙」の編者註によれば、ここを含む散文部最後の数行については、原稿の書体が明らかに意識的に傾けられたものになっているという（LI 47, note 5）。

26 François Mauriac, « Les bavards et le héros », *L'Écho de Paris*, 11 février 1933, p. 1.

27 Jean Cocteau, *Essai de critique indirecte* (1932), Paris, Grasset, 2003, p. 126. また、ヴィユシャンジュの伝記作者であるアントワーヌ・ド・モーも、「貧しい家の壁にもたれたミシェル・ヴィユシャンジュの一枚の写真」を見たことが、ヴィユシャンジュに

強い関心を抱いた最初だった、と明かしている（Meaux, *op. cit.*, p. 15）。

28 いずれも Michel Vieuchange, *Smara. Carnets de route d'un fou du désert*, Phébus, 1990 からの転載。

29 岑村「ピロルジュの墓、あるいはジュネにおける幻想の起源」、前掲論文、p. (230)-(233) を参照。

30 Genet, *Notre-Dame-des-Fleurs* (1943), Gallimard, coll. Folio, 1976, p. 16.

31 Genet, *Lettres à Ibis, op. cit.*, Lettre 21, p. 90.

本稿執筆にあたっては平成 26 年度慶應義塾学事振興資金による補助を受けた。ここに記して感謝する。